

亡国のパトス、喪のトポス

—共和国滅亡後のシエナ絵画における都市表象—

松原 知生 (西南学院大学)

1552年に始まる「シエナ戦争」と1555年におけるシエナ共和国の滅亡は、同国民の心に癒しがたいトラウマを刻み込んだに違いないが、それが同時代のシエナ美術に与えた影響については、いまだ明らかにされていない。本発表では、共和国滅亡後約半世紀の間に制作された宗教画におけるシエナの都市表象に注目しつつ、この問題について考察する。

戦争末期あるいは終戦直後、シエナの画家ジョルジョ・ディ・ジョヴァンニが描いた作品群を見ると、荒廃した自国のイメージを被写界から外すという「防衛機制」が作動していることが分かる。これに対し、戦後の都市景観を描いたシエナでの早い作例としては、フォンテジュスタ聖堂の《ペストの聖母》やヴァザーリの弟子ズッキによるサン・フランチェスコ聖堂の祭壇画など、1570年代の作例があるが、いずれもフィレンツェ画家によるものであり、とりわけ前者には勝者側のイデオロギーが色濃く反映している。

シエナの画家が故国のイメージを画中に描き込んだ戦後最初の作品は、サリンベーニとその弟子ヴァンニによるサン・ベルナルディーノ祈祷所の天井画(1580年)である。画面下方にはシエナの景観が広がり、戦争末期の激戦地カモッリーア地区が真正面から捉えられている。だがこれは必ずしも敗戦の「喪」が明けたことを意味しない。すでに解体されたはずのシエナ軍の孤塁群がなお場を占めている一方、その廃材を利用してコジモ1世が築かせた巨大なメディチ要塞は画面から「検閲」・抹消されている。すなわちこれは、共和政時代のまま時が止まった虚構のシエナなのである。

さらに注目されるのは、1588年から翌年にかけてカゾラーニが行なった、シモーネ・マルティエーニによるカモッリーア前門ファサードのフレスコ画《聖母被昇天》の描き直しである。画中のシエナは聖母によって庇護されているが、実際の門の向こうに見えていたのは、メディチ家の支配下にある属国シエナの哀しい姿であった。実際の都市景観の上方に虚構のパノラマを位置づけることで、画家は現実の転倒あるいは時間の逆行を目論んでいるように見える。魔術的とも呼びうるこのような操作は、シモーネの古画を取り巻くように描かれたカゾラーニ作品をさらに画中画として包含したヴァンニやマネッティの諸作品において、入れ子状に重層化されていく。

シエナ絵画における都市表象については従来、主にトポグラフィー的な観点から研究されてきたが、ここで採用されるのは、敗戦後のシエナというトラウマ的なトポスがどのようなロジックに従って視覚的に構造化されたのか(もしくはされなかったのか)に着目する、トポロジー的な視点である。そしてこのような迂回路を経ることによって、亡国のシエナ人たちが抱いていた直接表象されることのない情念=受苦(パトス)の図柄を浮かび上がらせる、いわばパトロジー的なイメージ分析が試みられる。